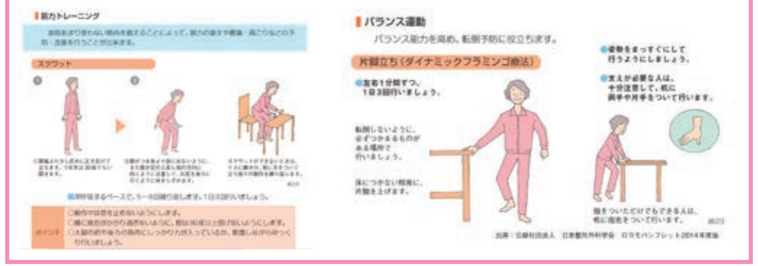
赤十字講習の普及を通して地域の皆さんの健康をサポートしていただく「赤十字地域の絆ボランティア」を募集しています！

「赤十字地域の絆ボランティア」とは
地域の困りごとへの対応や暮らしのサポートと赤十字講習（救急法や健康生活支援講習等・防災セミナー普及活動のサポートを日赤職員と協力して行う個人ボランティアです。

主な活動内容
- ●一人暮らし高齢者の生活支援、生きがいづくり（サロン等の開催）
- ●特技や資格を活かした活動（日赤岩手県支部が認めるもの）
- ●講習、防災セミナーの運営補助や内容の一部（体操など、一部下記参照を地域の人と一緒に定期的に実施

赤十字講習（健康生活支援講習）の一部をご紹介

ロコモティブシンドローム（運動器症候群）予防のために、毎日できる簡単体操



令和3年度青少年赤十字（JRC）スタディー・プログラム開催！

（2022年に、青少年赤十字創設100周年を迎えます）

12月25・26日、全国のJRC加盟校の中高生307人の仲間がオンラインでつながり、JRCスタディー・プログラムが開催されました。岩手県からは、盛岡第二高等学校、一関第二高等学校、岩谷堂高等学校、下橋中学校、仙北中学校の併せて5校8名が参加し、リーダーシップとコミュニケーション、コロナ下における人道の心や環境問題の学びのほか、防災・SNS・国際理解についてのグループセッションを行いました。岩手チームも初対面の固さも次第にほぐれ、互いに協力し合い、意見をまとめ、積極的に発表するなど大いに盛り上がりました。

参加した生徒の皆さんは、2日間にわたり赤十字の歴史や、理念、人道の考え、戦争と平和について真剣に考え、自分に何ができるかを考えるきっかけになったと思います。

令和4年度は、JRC100周年の年となります。令和3年度に実施したポスターコンクール入賞作品と「私の考える青少年赤十字」メッセージの展示会などを開催する予定です。

次世代へ繋ぐ社会貢献
遺贈・相続財産寄付

ご自身や故人の思いを広く社会に役立てるために資産の有効活用を考えてみませんか？

10/20連携協定締結式の様子

日赤岩手県支部では、遺贈（遺言による寄付）、相続財産寄付を承っています。
「遺贈」等のご検討は法律の専門家へのご相談が安心です。
当支部は、令和3年度に岩手県司法書士会との連携協定を締結しましたので、円滑に司法書士会へお繋ぎすることが出来るようになりました。
また、遺贈等に関するセミナーを2/23（水・祝）にホテルメトロポリタン盛岡ニューウィングにて岩手県司法書士会と共催で開催します。今後も定期的に開催する予定ですので、ご興味のある方はお気軽にお問い合わせください。

高額寄付者のご紹介

令和3年4月～12月に岩手県支部へ10万円以上のご寄付をいただき、掲載のご了解をいただいた個人様・法人様のお名前をご紹介しています。（順不同）

個人
- ・大山　光則　様（故人）
- ・畠山　一茂　様
- ・遠藤　武　様
- ・藤原　昌子　様

法人
- ・中舘建設（株）　様
- ・（株）ヤマモト　様
- ・（株）岩手銀行　様
- ・（株）岩本電機　様
- ・（株）本宮運輸　様
- ・（株）佐藤建設　様
- ・東京エレクトロン テクノロジーソリューションズ（株）　様
- ・（株）岩手防火管理サービス　様
- ・医療法人サイトウデンタルクリニック　様
- ・みずかわ耳鼻咽喉科医院　様
- ・H2（有）　様
- ・医療法人アンビシャス 坂の上野田村太志クリニック　様
- ・ささきクリニック　様
- ・（株）サンギフト　様
- ・（有）プレゼンハウス　様
- ・ジブラルタ生命保険（株）盛岡支社　様
- ・コロナあんしんプロジェクト　様

昨年度、高額の寄付を赤十字に寄せていただいた釜石市在住の鈴木様に対し、日赤釜石市地区の野田地区長から厚生労働大臣感謝状と日本赤十字社社長感謝状を贈呈しました。鈴木様は毎年、赤十字への寄付を継続していただいており、日赤岩手県支部の活動に大きく貢献されています。

赤十字寄付金付き自動販売機設置企業様のご紹介

社会貢献の一つとして様々な企業様から導入いただいています。設置する人も、飲料を買って飲む人も気軽にできる社会貢献です。

令和3年度7月～12月に5社9台の寄付金付き自動販売機を設置していただきました。（県内合計48台）

- ◆盛岡市　盛岡いすゞモーター株式会社　様
  株式会社吉田測量設計　様
  岩手スバル自動車株式会社盛岡都南店　様
- ◆一関市　伸和ハウス株式会社（水沢支店）　様
- ◆岩泉町　小野新建設株式会社　様

寄付金付き自動販売機と従業員様

発行者　日本赤十字社岩手県支部　〒020-0831 盛岡市三本柳 6-1-10　TEL 019-638-3610

赤十字いわて

No.58
2022
冬季・春季号

間もなく

東日本大震災から11年

～岩手県支部の活動の「振り返り」と「現在」～

救うを託されている。

私たちは「託して」くださる多くの方々の「救いたい」という思いを形にしてまいります。

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　岩手県支部

日赤岩手県支部の活動はインスタグラムをご覧ください。

特集

東日本大震災発生直後の災害救護活動から復興支援まで

岩手県内での災害救護活動

平成23年3月11日 14時46分 東日本大震災発生

発災翌日には、岐阜、福井、静岡、秋田の赤十字救護班が岩手入りし活動を開始したのを皮切りに、他県から続々と派遣された救護班が沿岸被災地で活動しました。

4月以降は県の調整のもと、赤十字は山田町、釜石市、陸前高田市を拠点に活動しました。山田町は近畿ブロックが担当し5月まで、釜石市は関東ブロックが担当し6月まで、陸前高田市は北海道・東北ブロックが担当し7月末まで活動し、被災者の救護にあたりました。

発災直後から7月30日の撤収までに、全国25支部の赤十字救護班延べ345班が岩手県内で活動し、約31,200人の方を診療しました。

9月からは、復興支援活動へ移行し、大震災から間もなく11年を迎える現在も、復興支援事業として継続しています。

- 期間：3月11日～7月30日
- 診療者数：約31,200人
- 活動支部数：25支部（1都1道2府21県支部）
- 活動班数：345班（2,660人以上）
  一日の赤十字最大活動数（3月15、16日に16班）
  ※活動班345班のうち盛岡日赤の医療班派遣：97班
  同班派遣にかかる従事者数：649人
  （医師126人、看護師256人、薬剤師66人、主事201人）

岩手県内（令和3年3月1日現在）

人的被害		住家被害	
死	者：5,145人	全壊：19,508棟	
行方不明者：	1,111人	半壊：	6,571棟

引用元：消防庁ホームページ　令和3年3月9日付
「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について（第161報）」から一部抜粋

平成23年度～令和2年度の復興支援事業

海外救援金を財源とした復興支援

- 海外赤十字社などからの支援：約600億円
- クウェート政府からの原油支援：500万バレル※
  ※日本円換算で約400億円

海外救援金総額約1,002億円のうち、岩手県への支援は約134億円

＊仮設住宅入居者へ震災前の生活を取り戻す第一歩を踏み出すための環境づくりとして、生活家電セットの寄贈や、甚大な被害を受けて運休していた三陸鉄道の車両や駅舎の整備等に海外救援金を活用しました。

仮設住宅入居者へ生活家電6点セット（洗濯機、冷蔵庫、電子レンジ、テレビ、炊飯器、ポット）の寄贈

三陸鉄道における駅舎、車両整備

岩手県支部では、平成23年9月から被災者の健康支援、心理社会的支援、地域コミュニティ形成を目的に沿岸被災地での復興支援事業を開始しました。

〈主な事業〉

- ●臨床心理士との協働による「心理社会的支援活動」
- ●奉仕団による「ノルディックウォーキングによる健康支援」
- ●奉仕団による「ふれあい炊出し交流会」
- ●被災地の小学生に対する「教育支援～出前講座～」
- ●医師や看護師を目指す被災地の中・高校生を盛岡赤十字病院に招いての「職場体験」
- ●不来方高校合唱部による「JRCふれあいコンサート」
- ●被災地の小学生を招いての「サマーキャンプ」

岩手県支部の現在の復興支援・平時の備えに関する取り組み

令和3年度復興支援事業

平泉町でノルディックウォーキングと交流会のイベントを開催

11月17日、釜石市、大槌町、陸前高田市の主に災害公営住宅にお住まいの方々をお招きし、健康増進とコミュニティ形成を目的としたノルディックウォーキングと交流会のイベントを行いました。

道の駅平泉から毛越寺までの間を秋の景色を楽しみながらゆっくり散策し、心地よい汗を流していただきました。

昼食の後、みんなで正月飾りのしめ縄づくりをしながら参加者同士の交流を深めました。

大槌町の方々と楽しいひとときを

赤十字奉仕団ふれあい交流会

11月8日、花巻市4地区の赤十字奉仕団が大槌町でふれあい交流会を開催しました。

この事業は、各奉仕団の特色を活かし、災害公営住宅等で暮らす方々との交流を図ることを目的に実施しています。

棒を使った体操で体をほぐした後は、お互いに踊りを披露しあい、和やかな雰囲気の中、時が過ぎていきました。

沿岸で赤十字救急法基礎講習を開催

胸骨圧迫の練習をしている様子

10月から沿岸の4市で赤十字救急法基礎講習を開催しました。

講習と併せて災害時の食事（炊出し）を紹介し、昼食時に食べていただき好評でした。

普段は盛岡市での開催が中心ですが、震災から10年目を迎えた今年度は、沿岸の皆様を対象にいのちを守る講習を実施しました。

平時の備え　～令和3年度～

今年度実施・参加した救護訓練、研修

- 岩手県総合防災訓練
- 管内施設合同災害救護訓練
- 大規模地震時医療活動訓練
- 救護看護師養成研修
- 災害救護基礎研修

東日本大震災後、全国各地で毎年のように大災害が発生しています。

岩手県支部では、災害発生時に迅速・的確に対応できるよう訓練や研修を行っています。

9月15日、岩手県支部管内施設の職員による救護員の養成・スキルアップ研修と、避難所救護活動を想定した訓練を実施しました。

10月30日、国が主催する「大規模地震時医療活動訓練」（東日本大震災と同レベルの災害想定）に盛岡赤十字病院DMATが参加しました。患者の空路搬送では、岩手県沿岸（被災地）から花巻空港を経由し、航空自衛隊と連携して自衛隊機が福岡県（被災地外）まで搬送しました。

今後も、非常事態に備えて研鑽に努めて参ります。

また、救援物資等も様々備蓄し、新たな災害に備えています。

訓練での避難所における聞き取りの様子

花巻空港での活動

緊急セット

災害対応ユニット

緊急災害用トイレ

岩手県支部で備蓄している救援物資や資機材の紹介

〈避難所用〉
- 毛布　・緊急セット　・安眠セット　・タオルケット
- パスタオル　・ワンタッチパーテーション
- 多目的テント　・避難ルームテント　・段ボールベッド　など

〈救護班用〉
- 国内型災害対応ユニット（dERU）　・緊急災害用トイレ
- 備蓄食料　など

東日本大震災時の活動をはじめ、長年にわたり赤十字事業に取り組んでいただいているボランティアにインタビュー！

今回は、平成29年度～令和3年5月まで赤十字奉仕団中央委員会委員長を務めていただいた増沢純委員長（一関市大東赤十字奉仕団）にお話しを伺いました。

増沢委員長の赤十字ボランティア歴37年の経歴

①一関市大東赤十字奉仕団への入団	昭和60年4月～
②一関市大東赤十字奉仕団での委員長就任	平成13年4月～
③岩手県赤十字奉仕団での委員長就任	平成21年4月～
④赤十字奉仕団中央委員会での委員長就任	平成29年6月～令和3年5月

Q ご自身がボランティアを始めたきっかけを教えてください。

1980年代に「岩手県青年の船」の第1回に参加したのがきっかけです。当時、下船の際に県の幹部の方から「君たち若者が将来、岩手のリーダーになってくれることを期待します」との言葉が胸に響き、自分も地域で出来ることを頑張ってみようと思いました。

手始めに3年間、盛岡市内で地域でのスポーツ推進や福祉活動に参加しました。その後、生まれ故郷である一関市大東町に戻り、子供たちに無償で卓球の指導を始めました。そして、地元の赤十字奉仕団に入団し現在に至っています。

Q 東日本大震災直後はどのような活動をされましたか？

発災から数日後避難所に行ってみると体育館に仕切りもなくプライバシーが全くない状態でした。私は、卓球で使用する防球フェンスを利用したらどうかと避難所運営者に提案したところ、是非お願いしたいとの要請があったため、早速卓球メーカーに相談し無償で提供していただくことになりました。メーカーの協力があり8つの避難所に合計750枚を送り、避難者等に大変喜ばれました。赤十字の思想がこのような考えや行動を生み出してくれたと思っています。

また、一関市大東赤十字奉仕団としては、陸前高田市矢作町生出地区の要支援者に対し、他団体と協働しながら食事作りを34日間実施しました。ハイゼックス非常用炊出し袋を使用した炊出しのノウハウを活かし、おかゆ希望の方等、急な要望にも対応することが出来ました。

Q 震災を経て全国の委員長になられましたが、どのような取り組みをされましたか？

私が中央委員会委員長に就任してからも全国各地で自然災害が多く発生しました。東日本大震災の経験を活かし、各地域での自分たちの特色を生かした奉仕団活動を充実させ自助・公助・共助の連携を目指すよう努力することや、新型コロナウイルスが蔓延して活動が制限されている中でも出来る活動を見つけていこうと発信し続けました。

Q 今後のボランティアに期待することは何ですか？

個人の持っている能力や、奉仕団の特色は様々あると思うので、その特徴を最大限に生かしながら、地域のニーズに合わせた活動を行って欲しいと思います。岩手県支部では、様々なボランティアを養成していますので、自分にあったボランティアを見つけ、是非我々とともに地域のボランティア活動を盛り上げていきましょう！

増沢委員長の働きかけにより設置された卓球用防球フェンス

避難所のプライバシー確保等の一助となった

震災後も積極的に防災教育に取り組む増沢委員長

中学生にハイゼックスを使用した炊出し方法を指導している様子